

ランサーアルトリアと同棲する話。

店主に一礼し、バイト先の酒屋を出ると、空は黄色に染まっていた。

今日もよく働いた、と独り言ちながら何度か伸びをして、視界いっぱい広がる街を眺めた。

なんとということはない、どこにでもありそうなこの街は、しかしかつて、その全てを焼き尽くされた。

魔術王による人類焼却。

世界を滅ぼしかけたその企みは、とある組織によって阻止された。

そんな過去などなかったかのように、街は人の営みで溢れている。

視界に映る商店街には、家路を急ぐ人々の姿が在る。

誰もが皆忙しなく、しかし確かに生きていた。

——胸の内を、万感の思いが満ちた。

確かに自分は、この世界を救ったのだと。

自分たちの手で拒んだ過去であっても、あの日々を忘れることはない。

何もかもが黒焦げになったあの焼け野原を、今でも覚えている。

そこで得た出会いや別れも、何一つ忘れることなく鮮明に記憶している。

——我が親愛なる、聖槍の担い手のことも。

自分もまた、街の人たちと同じように家へと急いだ。

愛すべき我が家。

今の自分にとって、帰るべき場所。

バイト先から二十分。

大橋を渡った先にその家は存在する。

少し古びた日本家屋。小さな池のある庭がチャームポイントだ。

二人暮らしをするにはやや広いこの家だが、偶然助けた老夫婦が格安で貸してくれているため、家賃だけで言えばそこらのアパートよりもずっと安い。

自分としても、『彼女』を狭苦しいアパートに押し込めるのは忍びなかったため、本当にありがたかった。

優しい老夫婦に感謝しながら、ガラガラと引き戸を開ける。

そして、自らの帰宅を告げると、廊下の向こうから。パタ。パタと足音が届き、

「おかえりなさい、マスター」

そんな、穏やかな声が出迎えてくれた。

金髪碧眼の彼女は、カルデアにいた頃の戦闘服ではなく、クリーム色のセーターにピンク色の愛らしいエプロンを身に纏っていて。

その穏やかな笑みを見ただけで、今日一日の疲れが吹き飛ぶのが実感できた。

誰よりも信頼する騎士に、心からの笑顔を返しながら、彼女にただいまと告げた。

世界を救い、その後処理を全て済ませた後、自分はカルデアには残らず日常に帰るという選択をした。

元々、魔術の腕はからっきしだったものだから、カルデアの研究者として残るといっなのは少し無理のある話だった。

ダヴィンチちゃんを始めとしたメンバーたちは別れを惜しんでくれたけど、最後

には快く送り出してくれた。

『どうか元気で。君に最上の幸福があることを祈るよ』

涙ながらにこちらの手を取り、笑顔を見せてくれたダヴィンチちゃんの顔を覚えていた。

そうして、若者が持つにしては些か莫大な資金と幾つかの魔術礼装を手に、カルデアを出たのだが……。

「♪」

キツチンでは、エプロン姿の騎士王が鼻歌交じりに具材を切っている。

手伝うと言ったのだが、『仕事で疲れているだろうから』と無理やりソファアに座らされた。

なんとなしに点けたローカル番組にもすぐ飽きてしまい、今はぼんやりと彼女の後姿を眺めている。

同棲を始めた頃は、そのジーンズに包まれた尻にドギマギとしていたものだが、

今はただ、彼女の後姿に見惚れている。

綺麗な人だとは、カルデアにいた頃から思っていた。

ただ、こうして共に生活するようになって、より強くそう思うようになった。

彼女は、ただ夕食を作っている時でさえ、美しかった。

「……そうじつと見つめていても、夕食はすぐには出来上がりませんよ？」

視線に気づいた彼女に、そうくすりと笑われ、慌てて目を逸らした。

決して悪い事をしていたわけではないのだが、彼女にたしなめられると、どうにも母親に言われているような気がして、こちらが悪いように思えてくる。

もつとも、その事を彼女に告げると、いささか機嫌を損ねてしまうのだが。

『マスター。貴方を産んだ覚えはありません。……私に母性を感じてくださるのは嬉しいですが、そこはお忘れなきよう』

珍しくむすつとした表情を見せた彼女の機嫌を直すまでに、丸一日かかったことをここに記載しておく。

さて、どうしたものか。

手伝いも断られ、テレビもロクな番組がない。

やることを失ってしまった自分は、ふと、どうして彼女と同棲することになったのかを思い出し始めた。

『マスター』

カルデアを出た自分を、聖槍の騎士ことアルトリア・ペンドラゴンは自慢の愛馬に乗り、颯爽と追いかけてきた。

忘れ物でもあったか、と問うこちらに、彼女はふるふると首を横に振り、それから穏やかな笑みを見せた。

『マスター。私も、あなたの旅に同行します』

突然の宣言に呆けた声を漏らしたこちらの眼前、アルトリアはダウン・スタリオンから降り、彼を消失させた上で、

『この身は貴方にとっての槍。貴方を守る義務があります』

それは騎士たらしとする彼女らしい言葉だった。

だが、それだけでは同行を受け入れられない自分がいた。

今の自分は、もはやマスターではない。

彼らとの契約は切れていないが、自分はもう戦いの場にはいない。

そんな自分のために、輝かしい騎士王の時間を費やすことは、勿体ない事のように思えたのだ。

だから、彼女の申し出が有難い事だと理解していながらも、自分はそれを拒もうとして、

『それに……』

その前に、どこか恥ずかしそうに頬を赤らめながら、口を開いた彼女に目を奪われた。

『私は、貴方とこの世界を見ていたのです。他でもない貴方と……私を好きだと
言ってくれた、貴方と共に』

そう言つて、こちらの手をそつと握つてくる彼女に、何一つ言葉を発せなかった。それほどまでに、彼女の表情は雄弁に彼女の胸の内を語っていたのだ。

自分のような、鈍感な人間にすら、彼女が何を想い、誰を想つてここまで来てくれたのかと気づかせるほどに。

『妻として、生きた事はありません。ですが、努力はするつもりです。決して貴方の枷にはなりません』

だからどうか、と彼女はこちらをまっすぐに見つめた。
碧の瞳。

震えるその水面には、どこにでもいそうな男の姿が映っていて。

『マスター……』

とても、彼女のものには思えない、縋るような声。

——考える時間は必要なかった。

言葉すら、発する事はなく。

ただ、彼女を抱きしめた。

それで終わり。

自分は、彼女と共に歩むことを決めた。

「……スター……マスター」

彼女の声に、ふと目を覚ました。

「おはようございます、マスター。お疲れのようですね」

視界には優しげに微笑むアルトリアの姿がある。

どうやらソファで寝落ちしてしまったらしい。

すまないと謝ると、彼女はふるふると首を横に振った。

「私を養うために頑張っていたいている証拠ですから。夕食は食べられそうですか？」

彼女の問いにもちろんと頷く。

彼女お手製の食事を食べ逃すなど、万死に値する蛮行だ。

「そうですか。では、手を洗ってきてください。その間に配膳をしておきますから」
ありがとうと礼を言い、手洗い場へと向かう。

本日の献立は和風だった。

焼き魚に味噌汁と、この国特有の料理が並ぶ。

全て、彼女が手掛けたものだ。

どうも彼女は、カルデアにいた頃から料理の練習をしていたらしい。

『料理を学んだ理由、ですか？ 妻として料理もできないようでは、貴方の枷になつてしまうと思いましたので』

頼光たちからこの国での妻の在り方を聞いたらしい彼女は、それに倣うべく特訓を開始した。

ちようど運が良いことに、自分たちのカルデアにはこの国出身かつ現代の料理にも明るい英霊が一人いたため、師には困らなかつたとの事。

『君が料理か……いや、世の中分らないものだなと思つてね』

そう言つていつも通りニヒルに、しかしどこか嬉しそうに笑う彼の下、彼女はその器用さもあつてメキメキと腕前を上げ、ついに正妻系サーヴァントの一角を連ねる事となつた。

「さあ、どうぞ召し上がってください、マスター。お口に合うと良いのですが」

彼女に勧められるまま、箸を取り、騎士王特製の夕食にありつく。

鯖の焼き加減、味噌汁の塩加減、ほうれん草の固さ。

どれをとつても申し分なしだ。

彼女と生活を始めると決めた時は、自分が料理を担当するつもりだったが、ここまでのものは出せなかっただろう。

「美味しいですか？ それは何よりです」

率直に感想を告げると、アルトリアは嬉しそうに微笑んだ。

「カルデアに来るまで、料理の経験はほぼありませんでしたが……これは、良いものですね」

彼女の言葉に頷く。

思えば、バレンタインの時も彼女は非常に凝ったチョコレートを作っていた。

生前はその機会がなかっただけで、料理という行為は彼女に合っているのかもしれない。

なるほど、と一人納得するこちらの眼前、彼女は胸に手を当てながら、幸福を噛みしめるような表情で、

「最愛の貴方が美味しいと言ってくれる。それを待ち望みながら食事を作る楽しみは、何物にも代えられません」

そんな事を言つてのけた。

「？ マスター？ 顔が赤いですが、もしや風邪でも引きましたか？」
不思議そうに問うてくる彼女にふるふるとう首を横に振る。

頬が熱い。

さっきのはあまりにも不意打ちすぎた。

ただ料理が好きなのかと思つていたところに、自分を想つて作るのが楽しいのだと告白されれば誰だつてこうなる。

たまらなくなり、その場で立ち上がった。

「マスター？ いきなりどうしつ、あつ……」

そのままテーブルの向かいにいた彼女の元へ歩み寄り、その体軀を抱きしめた。
彼女は一度驚いた声を上げながらも、こちらにされるがままになっている。

「その、マスター……貴方との抱擁は喜ばしい事ですが、あまり急に行われると、その……心臓に悪いので……」

恥ずかしそうにぼそぼそと告げてくる彼女に、一言言つてやる。

今のはアルトリアが悪い。円卓で議決を採つても満場一致のはずだ。

「わ、私、ですか……では、その……甘んじて、受けさせていただきます」
そう言つて、アルトリアはきゅつとこちらの身体を抱きしめ返してきた。

「……………」

無言で抱きしめてくる彼女の、その胸の鼓動がひどく速かったことをここに記録しておく。

夕食を無事完食し、二人で皿洗いを済ませた後、入浴タイムとなった。

「力加減はいかがでしょうか？」

ちようどよいと答えながらも、その声は若干震えている。

未だに、彼女との混浴には慣れない。

慣れる日が来るようにも思えない。

頼光たちからこの国の妻の在り方を教わった彼女だが、その中には誤ったものが混ざりこんでいた。

この国の妻は夫の背中を洗い流すものだ、というのもその一つだ。

同棲初日、湯船に浸かっている最中に突然来訪してきたバスタオル姿のアルトリアは今でも忘れられそうにない。

慌てふためく自分と、それを見て何か間違えたのかと慌てる彼女は、紆余曲折の末、風呂場で二人、正座で会話を始め。

その場で自分は、彼女の知識が誤っていることを伝えたのだが、

『なるほど……ですが、その……私は、その方法で貴方を労わりたいのですが……』
彼女は上目遣いで、恥じらい交じりにそう告げてきた。

許可を出すまで一秒とかからなかったと思う。

仕方のない事だ。最愛の彼女にそんなおねだりをされては、断れるはずもない。そうして自分と彼女は、每晚二人で混浴することになったのだが。

「♪」

鼻歌を歌いながらこちらの背をタオルで擦る彼女は、当然のようにバスタオルしか身に纏っていない。

その豊かな胸部はバスタオルの下からでも圧倒的な存在感を示しており、肉感溢れる太ももはバスタオルの裾から眩しく露出している。

バスタオルを着用してすらすらエロスの塊のような身体をしているのに万が一脱げてしまった場合自分がどうなるか分からないと危惧したため、せめてバスタオルではなく水着の類を着てはどうかと一度勧めたのだが、

『お気遣いありがとうございます。ですが、貴方になら裸を見られても構いませんので』

と、さらりとかわされてしまった。

見られていい悪いの問題ではなく、と追及しようとしたのだが、その前に、

『万が一、私の裸体を見た貴方が獣になってしまったとしても、その……私は、構いませんので』

と、頬を赤らめながら告げられてしまったため、もう何も言えなくなっていました。

むしろその瞬間に襲わなかった自分を褒めてほしい。

そういった経緯もあり、自分はバスタオル姿の彼女との混浴を受け入れている。実際、悪い事ばかりではない。

彼女のタオル捌きは中々のものであり、自分で洗うよりも数段心地よいものだ。

それに加え、愛する彼女に背を流してもらうことは、殊の外疲労回復に役立った。労わられているという実感は、疲弊した精神をこれでもかと癒してくれた。背後にいる彼女の存在を有り難く感じていると、

「……マスター」

ふと、彼女が自分を呼んだかと思えば、ふによん、と。

背中に、何やら大きなマシユマロのような物が押しつけられたのを感じた。

「ふふ、先程のお返しです。驚きましたか？」

楽しそうに告げるアルトリア。

彼女は背後からこちらを抱きしめていて、どうやらそれは、先程自分がいきなり抱きしめた事への意趣返しらしかった。

しかしこちらはそれどころではない。

荒れ狂う本能という名の獣を理性の鎖で縛り上げる。

三蔵直伝の読経に加え、マッスルサーヴァントたちの姿を脳裏に鮮明に描くことで獣の鎮静化を図る。

「……すみません、マスター。気分を害してしまつたでしょうか？」

こちらからの反応がなかったためだろう、彼女は申し訳なきように問うてきた。アルトリアは何も悪くない。

悪いのは、本能一つロクにコントロールできない自分だ。

「本能……？ あっ……」

こちらの言葉に、彼女は諸々察してくれたらしく、黙り込んでしまった。

聡明な彼女はそのままこちらから離れ……することはなく、むしろ自ら身体を押しつける形でその密着度を上げてきた。

慌てふためくこちらに、しかし彼女は消え入りそうな声で。

「私は、『構わない』と伝えたはずですが」

いや、そう言われても困る。

「困る？ マスターは、私では満足できませんか？」

いや、きつと大満足だとは思うがそういう話ではなく。

準備やムードといった言葉が脳内を渦巻く中、

「……マスターは、私を抱きたいとは思いませんか？」

そつと、繼るようにねだるように紡がれた言葉に、何か切れた。

「っ、あつ……」

一瞬で振り向き、彼女を風呂場に組み伏せる。

もう何も考えられない。

頭にあるのは、誰よりも輝かしい彼女を我欲のままに食ふ事だけ。

一匹のけだものと化し、手始めにそのはだけかけたバスタオルを引き剥がそうとして、

その、揺れる瞳に気がついた。

「っ……マス、ター……」

消え入りそうな声で、こちらを呼ぶアルトリア。

こちらを挑発しているようにすら思えた彼女は、どこか、怯えているように感じた。

その表情を見ただけで、自分は人としての在り方を即座に取り戻した。

すまないと謝罪しながらその身体を起こすと、彼女は恥ずかしげに頭を下げた。

「……申し訳ありません。私も未だ、覚悟が決まっていなかったようです」

覚悟と言われれば、自分だって同じだ。

欲望のままに彼女を抱こうとした。

反省すべきことだ。

「いえ、先程は私がかけしかけたために起きた事。責は私が負います」

そういうわけにはいかない。

襲ったのはこちらだ。

「む……強情ですね、マスター」

妻が強情なもので。

自分も強情にならないと、折れてくれないのだ。

「……そこまで言うのでしたら」

こちらの言葉に、彼女は頷いてくれた。

「しかし、そうなるかと貴方は罰を受ける必要がありますね」

まあ、確かにその通りだ。

罪を犯したのだから罰を受ける。当然の摂理だ。

ここは定番の夕飯抜き刑だろうか。

「いえ、それでは私に対しても罰となりますので却下です」

毅然とした態度で告げるアルトリア。

……そんなに美味しいと言ってもらえるのが嬉しいのだろうか。

思わず頬を赤らめながら、ではどうすればいいだろう、と問うと、

「そうですね……では、こうしましょう」

と言って、アルトリアはこちらへと与える『罰』の詳細を告げた。

——恐ろしい罰だった。

『マスター。貴方には椅子になっていただきます』

彼女にしては中々拷問チックな罰が出たと思いきや、

『いえ、正確には背もたれでしょうか。湯船に浸かる私の背もたれになっていただきます』

全く別ベクトルの罰だと気づかされた。

『では、失礼します……よい、しよ……』

『その、重くはないでしょうか？』

『そうですか、それは良かった』

『……支えが欲しいですね。臍の辺りに巻いていただけると』

『どうしました？ マスター。これは罰です。素直に従ってください』

『ん……はい、そのまま強くしていただけると』

『……ありがとうございます。どうかこのまま続けてください』

『これは、思いのほか良いものですね……まるで貴方に包まれているように感じます』

『マスター……貴方はいかがですか？』

『私の抱き心地は、悪くはありませんか？』

『……ふふ、もう茹つてしまいましたか？ そんなに顔を赤くして……』

『マスター……』

と、そんな具合で天国のような生殺し地獄を味わわされた結果、自分は風呂に入る前より疲弊し、一も二もなく布団に倒れ伏していた。

「申し訳ありません、マスター。興が乗りすぎてしまったようです」

布団に転がるこちらを団扇で扇ぎながら、パジャマ姿のアルトリアは苦笑交じりに言う。

興が乗りすぎたと言うが、確かに彼女はひどく楽しそうだった。

その戦闘スタイルと同じく、基本的に攻める方が好きなのだろう。

その証拠に、

「あ……」

こうして、恋人繋ぎをされるだけで頬が赤らむ。

攻められると弱い、可憐な騎士王に思わず笑みを浮かべながら、アルトリア、と彼女の名を呼んで、そつと手招きした。

「……はい、マスター」

彼女は頬を赤らめたまま、そつと団扇を置き、こちらの隣へと横たわった。枕にしているのは、こちらの左腕だ。

「今日もお疲れ様でした、マスター」

碧の瞳でこちらの目をまつすぐに見据えながら、アルトリアはそう労わってくる。アルトリアこそ。

毎日家事をありがとう。

「いえ、それは妻として当然の事です」

毅然と言つてのけるアルトリア。

妻と、そう言つてくれたことが嬉しくて、思わずその頬に手を伸ばした。

「あ……」

彼女は一度声を漏らしたものの、穏やかな笑みでこちらの手を受け入れてくれた。

「マスター……」

愛おしげにこちらを呼ぶ声に、胸の奥がじんわりと温かくなるのを感じる。

アルトリア。

世界でたった一人の、最愛の人。

そんな彼女と、こうして穏やかな日々を過ごしていることの、なんと幸福な事か。

「……マスター。一つだけ、いいでしょうか？」

何？ と問うと、

「眠る前に、キスをお願いします」

そう、彼女は少しだけ恥ずかしそうに言った。

言葉は返さなかった。

ただ、彼女の方へ、そっと近づいた。

「ん……」

接触は一瞬、触れるだけの口付けを交わし、彼女と再び向かい合う。

「……ありがとうございます、マスター」

どういたしまして。

こちらこそ、どうもありがとうございます。

「いえ……貴方との口付けは、とても良いものですので」

そっと自らの唇に触れながら、微笑み交じりに言うアルトリア。

その表情が、あまりにも幸福そうに見えたから、

「え？……もう一度、ですか？」

おねだりをした自分に、アルトリアは目を丸くした。

「あ、いえ、嫌というわけではないのですが……」

アルトリアは、彼女にしては珍しく、何やら言い辛そうに言葉を紡ぎ、

「その……これ以上すると、胸の高鳴りが収まるまで、しばらくかかってしまうの

で……眠り辛く、なつてしまふかと……」

——そんな、可憐な事を告げてきた。

「あつ……ま、マスター！ ですから、急に抱きしめてはダメだと……」

頬を真っ赤にしながら彼女が何か言っているが、こればかりは仕方ない。

アルトリアが可愛すぎるのが悪い。異論は認めない。

「貴方はまた、そんな事を……」

呆れたように言いながらも、やがてアルトリアは観念したとばかりにこちらを優しく抱きしめ返してきた。

「伝わっていますか、マスター？ こんなにも胸の鼓動が早まっています。これでは眠ることなど到底できません」

そのようだ。申し訳なく感じている。

「では、責任を取っていただけますか？」

こちらを抱きしめながら、くすりと微笑みかけてくるアルトリアに頷きを返す。

今夜は、彼女が眠りに落ちるまで夜更かしと洒落込もう。

「ありがとうございます。では、しばらくの間、私にお付き合ってください」

言つて、彼女はこちらへと距離を詰め、すり、と頬を擦りつけてきた。
そんな彼女を愛おしく思いながら、自分は彼女と、他愛ない世間話を始めるのだ
つた。